

瀬戸内島嶼部における「醸造村」の形成と景観特性に関する研究

小豆島・内海地区の集落を対象に－

Study on the formation and the characteristics of viewscape in the island village which have soy-sauce factories
-A case study of Uchinomi Area in Shodoshima Island-

66148 石井 宏典

This study reveals the structure and the characteristics of “Towns of Soy Sauce Breweries (Jozo-machi: towns prospered from the production of soy sauce)”, through a case study of Uchinomi Area in Shodoshima Island, where is one of the most major producing districts of soy sauce in Japan. These kinds of historic towns which had traditional industries are getting valuable these days. Especially, “Towns of Breweries” are interested as a new classification category of historic townscape, though we don't have previous researches about them enough.

In this thesis, it is suggested that “Towns of Soy Sauce Breweries” have a two-layered structure. (i) Ground: the original characteristics mainly about the infrastructure of towns which was formed more than 200 years ago (ii) Figure: the subsequent characteristics mainly about the architectures related to the production of soy sauce. This suggestion leads the fact that we should take care of not only facilities about soy sauce production but their own formation histories when we discuss the preservation of “Towns of Soy Sauce Breweries”.

Keyword: 醸造町, 醤油業, 地場産業, 瀬戸内海, 離島, 集落景観, 集落形成史, 登録文化財

第 1 章 序章

1-1 . 研究背景と目的

【研究背景】

古来より、瀬戸内の島嶼の各集落は、孤立した環境の中で独自の文化を築き上げてきた。しかし、近年、「市町村合併」「橋梁による本土との陸路連絡」という政治・社会両面の環境の変化に伴い、そのアイデンティティは危機に瀕しつつある。さらに高齢化と過疎化は集落の文化の守る活力を衰えさせつつある。

小豆島は瀬戸内の最大の孤島であり、島東部の内海(うちのみ)地区は、江戸末期より醤油関連産業を生業として栄えた。内海地区の集落は、島嶼の集落としての特徴を色濃く残すと同時に、現在も大小さまざまな醤油工場群をはじめとする伝統的産業景観を現在も有している。

ここ数年、全国の醤油生産地による合同サミットの開催、醤油産業発祥地である和歌山県・湯浅が「醸造町」として重要伝統的建造物群保存地区に選定されるなど、地域の個性としての醤油産業の意味合いは増している。このような潮流の中で、小豆島においても、醤油産業の集積した伝統的景観を保全しようとするまちづくり活動が動きつつある。

【研究目的】

本研究の目的は、小豆島・内海地区の集落景観を対象に、現在集落内に点在している民家・工場・水源などの特徴的な景観の歴史と現状を調査し、一見ばらばらに見えるこれらの景観群の形成や特徴にまつわる背景を、統一的な観点から論じる(=物語化する)ことにある。

1-2 . 研究の意義

本研究の意義は、地域研究的な視点から見れば、これまで学術的立場・都市レベルの立場からの研究が無かった小豆島・内海地区において、歴史的景観をまちづくり・観光に活かす上で、「醤油産業」の枠組を越えた幅広い視点を提供することにある。

一方、広域的研究として見れば、内海地区の集落をケーススタディとして取り扱うことで、「山と海に面した島嶼部の集落景観」や「江戸時代中期以降に成立した醸造町の景観」の特性と全体像をとらえるうえで、切り口を示唆するという点にその目的がある。

小豆島・内海地区は現在も独立した離島にある集落である。また、醤油醸造業の集積としても、様々な規模の工場が幅広く存在していると同時に、近代の伝統的手法や工場の構造も最も色濃く残している。この点で、島外地区は「島嶼部」「醸造町」両者のケーススタディとして適当であると考えた。

1-3 . 既往研究

【島嶼部集落】

島嶼部集落に関する研究は、歴史的町並みの残る集落を中心に、各島において多数の先行研究¹⁾がある。傾向として、港町・漁村集落の研究が多く、農村集落に焦点をあてたもの²⁾は数が少ない。

【醸造町】

産業史から醸造業を俯瞰する研究は多いが、「醸造町」という切り口が確立されたのは近年のことで、その構造を空間的にとらえる研究は網羅されているとはいえない。湯浅など、一部の醤油生産地において限定的に研究がな

されているのみである。

【小豆島】

小豆島における人文地理的研究は、昭和40年代に郷土史家・川野正雄氏による一連の著作群³を嚆矢とし、その後もいくつかの研究がまとめられている。

また、地域内の建築に関する研究としては、一部の古民家のみ重点調査⁴、平成8年以降の文化財登録に際して行われた簡易調査がある。地区の多くの建築に関して網羅的な調査、精密な実測調査はまだ行われていないのが現状である。

本研究のように、地図などを用い集落空間全体を論じた研究は無く、また参考資料も著しく不足している。

1-4 本論での用語の説明

「醸造村」

現在、醸造業の集積地という意味で用いられている「醸造町」という分類の概念を拡張したもの。小豆島・内海地区の集落構造は、街路沿いに建物が立ち並ぶ「町」ではなく、豊富な緑地内に建物が点在する「村」であることから、このような語句を用いた。

「点景」

建物・道路・水・緑地など、景観を構成する一つ一つの要素。特に本論では、その地区独自の地理的環境や歴史を具現しているというニュアンスを含んでいる。

「集落の地と図」

集落の「地」とは道路・水路・寺社など、伝統的な集落の社会基盤の部分であり、「図」とはその上に構成された建築群一般を指す。時系列的に見れば、「地」が先に構成され、その上に後から形成されたものが「図」である。

第2章 瀬戸内島嶼部の集落景観の概要

瀬戸内の島嶼部の集落の多くは、山に挟まれ狭い谷の部分に位置しており、集落は山と海の両方を持っている。

中世以前、島が独立的な経済圏として活動していた時は、山・海両方に生活の糧を持ち、半農半漁の生業を営んでいたと考えられる。その後、近世以降、海運の興隆により、本土との結びつきが強くなると、外資獲得のための主産業が発達し、集落特有の生業が発達した。

規模の大きな島、本土に比較的近い島では相対的に農業が盛んである(図1⁵)。また、規模が小さく孤立した島においては漁業が盛んである。分布としては、瀬戸内海東部では漁業が盛んであり、西部では農業が盛んであるという相対的な傾向が見て取れる。

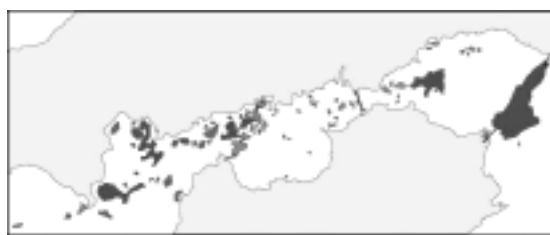


図1 瀬戸内島嶼部の第一次産業の構造

島嶼部の集落景観は、基本的に山・海両方の要素を持っているといえるが、その個性は特にこの生業に左右されるところが大きい。農業を生業とする農村であれば、集落後背の里山の際に特徴的な景観を持ち、逆に漁業あるいは海運業などを生業とする集落であれば、特に浜辺において特徴的な景観を持っているといえる。

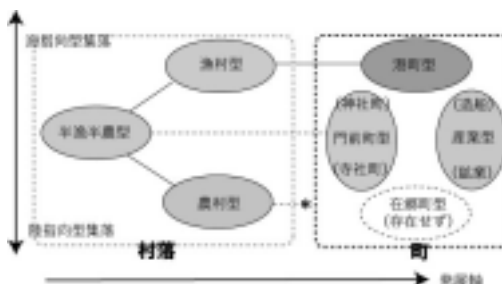


図2 生業にみる瀬戸内島嶼部の集落の構造の分化

もともと近世以前は「村」であった集落も、人と物資の交流が盛んになるにつれ、建物が軒を連ねる「町」へと変化する。瀬戸内島嶼部の場合、海に生業を持つ集落では海運の発展と共に「港町」が生まれた。山に生業を持つ集落では、島内での物資の交流が行われなかったこと、軸となる街道が存在しなかったことから、「在郷町」への発展はなかった(図2)。このことが、小豆島・内海地区が「醸造村」という特殊な形態を有していることの一因となっている。

第3章 醤油醸造業と生産地の概要

日本の醤油生産地の形成は、「物流」と「消費地」の2つの要素からとらえることができる(図3)。

「物流」の観点から見れば、近代までは陸運より海運が重要であり、近世中後期に発達した醤油産業は、例外なく原料の輸入と製品の輸出に適した海港か川港を持った集落に発展している。

また、「消費地」の観点から見れば、醤油生産地は近世の大都市近郊に位置しており、消費地との近接も重要であるといえる。



図3 日本の醤油生産地と江戸時代の五大都市
一方、醤油生産における「原料生産」の地理的近接は、
同じ醸造業でも良い水の湧出が不可欠な酒造などと異なり、
重要度は相対的に低めであるといえる。

表1 各地における醤油企業の分布

大手メーカー中心	軒数	大手+中小	軒数	中小企業のみ	軒数
銚子	3+1	龍野	1+11	大野	28
白杵	2+1	小豆島	1+25	碧南	7
野田	2			武豊	6
館林	1			湯浅	5
		(小豆島町)	1+17	柳井	3
				引田	2

現在の主要な醤油生産地における企業の分布は表1のようになっている。「生産の大規模集約化」「研究所設立による質の向上」によって近代化に成功した地域、伝統的な小規模な醤油醸造のみを維持している地域、の二極化が進んでいる。

醤油生産地における景観の特徴としては、以下の要素を列挙することが出来る。

- 醸造蔵等の醤油工場の建物群の風景
- 商品の販売を行う醤油の商店
- 工場に併設する醸造家の町家・民家
- 醤油生産の資本が作り上げた近代の公共施設群
- 港など、物流のための水運関連施設

このように、建造物ひとつひとつに共通の特徴を見いだすことができるものの、町割等の都市基盤については各地域によりその特徴が異なる。醤油産業は江戸中期以降に発達した比較的后発の産業であり、インフラに関しては、それ以前に形成された町の性格（城下町・港町など）に左右される部分が多い。

従って、醤油生産地（醸造町）の特性を論じる場合には、単に醤油生産・物流の施設だけに注目するのではなく、その「地」にある集落の形成史にも同時に眼を向け

ることが重要であるといえる。

第4章 小豆島・内海地区の集落景観

4-1 小豆島・内海地区の地誌的概要

小豆島は瀬戸内海東部にある瀬戸内最大の離島である。人口およそ33000人、島北西部の土庄町、島南東部の小豆島町、ほぼ同規模の2つの自治体に分かれる。島内には6港の旅客港があり、95便/日の旅客船が本土との連絡を行っている。小豆島町の高齢化率は33.4%(2005年)と全国平均と比較して高齢化が進んでおり、年1.3%の人口減少と過疎化も顕著である。

内海地区は島東部、内海湾に面した小豆島町の中心地である⁶。集落名で言えば安田・馬木・苗羽(のうま)の各大字を指し、人口5000人規模の地区である。近世は天領であったこの一帯は、江戸末期以降、小豆島の醤油産業の中心地となった。現在も醤油生産、および戦後それから派生した佃煮産業が地域の主幹産業であり、これらが生み出す産業景観は地区の個性となっている。

4-2 内海地区の集落の景観構成

【概論】

小豆島・内海地区は、近代の醤油工場群および醸造家の住宅群を建築的特徴として持ち、歴史的町並みとしては「醸造町」に分類されるといえる。

内海地区の集落の社会基盤を見ると、その「地」には【各論】で後述するような、近世以前からあった「瀬戸内島嶼部の農村」としての構造を持っていることがわかる。現在、内海地区に存在する「町」のほとんどの部分は、昭和以降に形成されたもので、醤油産業の発展がもたらした後発的なものであるといえ、内海地区の醤油醸造業はむしろ「村」の風景の中に存在している。

一般に、醤油醸造業は材料生産地と消費地の中間地に発展することが多く、ほとんどの醤油生産地は物流の交流地としての「町」中に存在している。従って、内海地区のように「醸造村」と呼べる景観を持つ醤油生産地は珍しい。

このような「醸造村」という性格は、醸造景観において特に2つの特徴を有している。第1の特徴は周辺にオープンスペースを持つがゆえに、工場施設群および併設する醸造家の全景を確認することができること。第2に小売のための商店空間をほとんど持たない⁷ということである。これらの特徴は、醤油産業の集積を地区の個性として活かそうとする「まちづくり」においても、この

おける最大の課題である。

本論で述べた、「地」と「図」の切り口、「山」と「海」のコントラストという切り口はまちづくりを行ううえで新しい方法論の提示として位置づけられる。

第5章 結論

【瀬戸内島嶼部集落に関する示唆】

瀬戸内島嶼部の集落の地理的構造は相似である。内海地区の集落をケーススタディとして、理解できる通り、その特徴的な風景の構造は「谷道沿いにある山の生活に関連した点景（緩斜農地・寺社・溜池など）」「浜道沿いの海的生活に関連した点景（塩田跡・神社・水路など）」の2つに分類できる。

【醸造町に関する示唆】

醤油生産地の構造は、近世前期以前に形成された各地によって異なる「地」の景観と、近世後期に形成された醤油生産地としての「図」の景観の2層レイヤ構造となっている。前者は主として社会基盤にその姿を残し、後者は主として建造物群にその姿をとどめている。したがって、「醸造町」の町並みを調査する際には、醤油産業が形成される以前の町の形成史も同等に追う必要がある。

【内海地区の醸造村の形成と景観構成に関する結論】

内海地区の場合、伝統的構造の工場で伝統的手法に基づいた醤油産業が根付いているという、醤油生産地としての「図」の個性を持っているのと同様に、「瀬戸内島嶼部の農村集落」という「地」の景観の個性を持っている。この「醸造村」のように周辺に豊富な緑地を持つ醤油生産地は他に類を見ない。

農家から発展した醤油企業、あるいは島嶼部の集落における特徴的な点景は、集落内全体に散らばって分布しており、これらを活用しその魅力を伝えていくには、従来の方法論とは異なる新しい切り口が必要である。本論のように、各点景の地誌を追い、その形成や特徴を統一的な観点から論じる（＝物語化する）ことは、その手法であると結論付ける。

<主要参考文献>

1. 内海町(1974)『内海町史』
2. 苗羽の今昔作成委員会(1995)『苗羽の今昔』
3. 小豆島醤油協同組合(2001)『醤の郷小豆島 小豆島醤油組合 100年史』

4. 白幡洋三郎(1999)

『瀬戸内海の文化と環境』,丸善ライブラリー

5. 離島統計センター(2004)『離島統計年報 2003』

6. 文化庁文化財部建造物課(2004)

『国際観光に資する地域資源活性化方策報告書』

<主要現地調査先>

【醸造町】野田・銚子・龍野・湯浅

【島嶼部】生口島(瀬戸田・中野)・高根島(高根)

高見島(浜・浦)・塩飽本島(笠島)

大崎下島(大長・御手洗)

<主要ヒアリング先>

1. 小豆島町

2. 内海地区・醤油企業

(マルキン忠勇・タケサン・正金醤油・ヤマサン醤油・ヤマロク醤油・高橋商店・坂下醤油・宝食品・ヤマイン醤油・藤庄醤油・木下幸次郎商店)

3. 内海地区長老会

4. 島宿真里

5. うすくち龍野醤油資料館(龍野)

6. ヤマサ醤油・ヒゲタ醤油(銚子)

7. キッコーマン茂木家(野田)

<補注>

¹ 瀬戸内島嶼部では御手洗(大崎下島)・笠島(塩飽本島)の2集落が重要伝統的建造物群保存地区に選定されている。これらの集落を始め、本浦(祝島)・浦(高見島)・東浦(女木島)などは先行研究が存在する。

² 瀬戸田町(1999)『瀬戸田町史 民俗編』に掲載されている生口島・中野集落の調査など。

³ 川野正雄(1969)『近年小豆島社会経済史話』

川野正雄(1970)『小豆島今昔 民俗を中心として』

⁴ 香川県教育委員会(1971)『香川県の民家』

⁵ 離島統計センター(2004)『離島統計年報 2003』等より作成

⁶ 「内海地区」という呼び方は一般的には余り成されない。本論では、醤油産業が集積している旧内海町中心部、安田・馬木・苗羽の各集落一帯を「内海地区」と称している。

⁷ ただし、一部の醤油醸造家の住宅の玄関には「勘定間」と呼ばれる数畳の部屋が併設している。

⁸ 小豆島・内海町オリーブ振興特区(平成15年4月認定、法改正による一般化に伴い平成17年9月廃止)

⁹ 内海町商工会(1992)『こころにたたかいまちづくり』

¹⁰ 内海町商工会(1997)『ひしお(醤)の郷整備構想』

¹¹ 小豆島町商工会(2007)『醤の郷へようこそ』

本論で述べた集落内の谷道が散策路となっている。